

筆道資料の探訪

大正昭和時代

鳴鶴の没後、丹羽海鶴、比田井天来が晋唐書風を礼讃推奨し最も剛強な筆を用いたため、長鋒の捌筆は一変して全国的に剛毫糊固筆の流行を生みました。これによって筆鋒を全部おろさずに使用する糊固筆、あるいは腰巻加工の剛毫筆が再び需要されるようになったのです。

しかし海鶴の没後、またまた筆に対する傾向に多少の変化がみられ、海鶴の使用した剛毫筆はあまりに剛強すぎるために、少し剛味を除き柔味を加えた「八剛」または「七剛」程度の筆が鈴木翠軒、田代秋鶴、上田桑鳩らによって推奨されました。筆は筆鋒の剛柔によって、剛毫筆とか柔毫筆とかの種類を区別します。十中の何割か剛または柔であるかを示すために次のような名称がつけられています。全剛、九剛、八剛、七剛を剛毫筆と呼称します。

六剛、五剛、六柔を中間毫筆と呼称し、七柔、八柔、九柔、全柔を柔毫筆といいます。全剛と全柔は優良な獸毛か特殊な原料でなくては作りにくいのです。中間毫筆は、一般的な原料を使っているので価格も安価で、製作も簡易でありいわゆる安物筆が多いのです。大正時代の末から昭和になると過去のように判然と一派一流の傾向がなくなり、雑然とした有様で菱湖流、鳴鶴流はもとより、三洲系あり、また一六を学ぶもの、海屋を慕うもの、あるいは直接中国に範を求めて六朝にさかのぼろうと



▲奈良時代(757年)
多賀城碑拓本

するもの、初唐を模すもの、あるいは顔法に従い、あるいは元・明に法を求めるなど、千差万別でそれぞれ各自が好むところに従っているのです。これは碑版・法帖の類が大量に印刷され一般大衆に広くゆきわたったこと、書に対する鑑賞眼が高まり選択が自由になったことによる結果でしょうか。